まこもが池遺跡

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

—富県宅地造成事業—

2002

伊那市教育委員会

伊那市土地開発公社

まこもが池遺跡

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

—富県宅地造成事業—

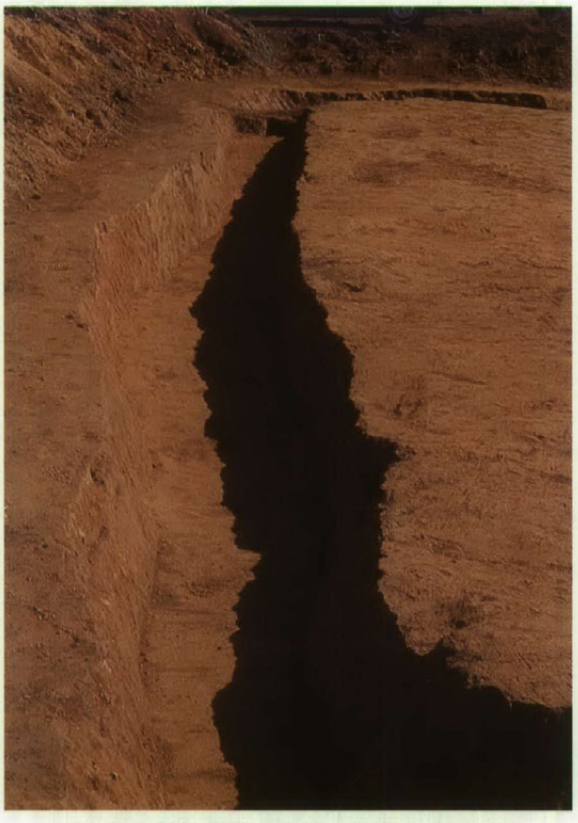
2002

伊那市教育委員会

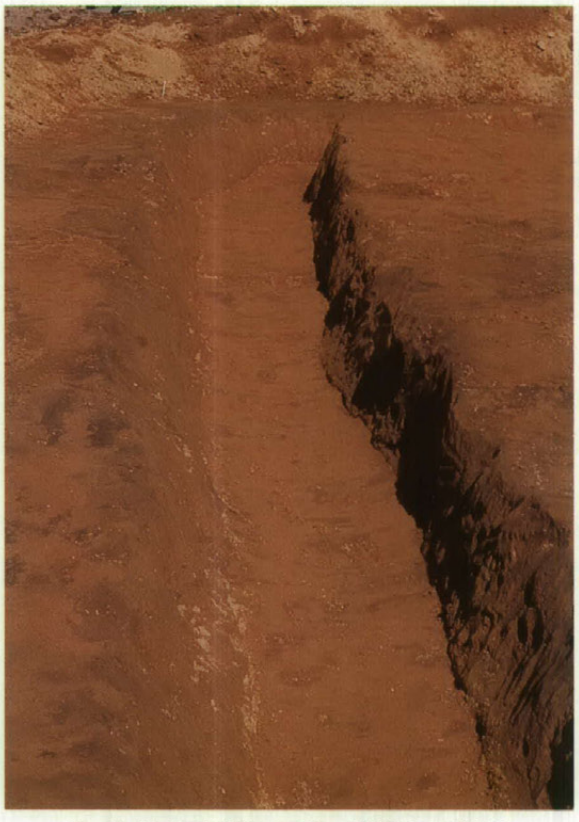
伊那市土地開発公社

第1号方形周溝墓（西側より眺む）

第1号方形周溝墓（東側より眺む）

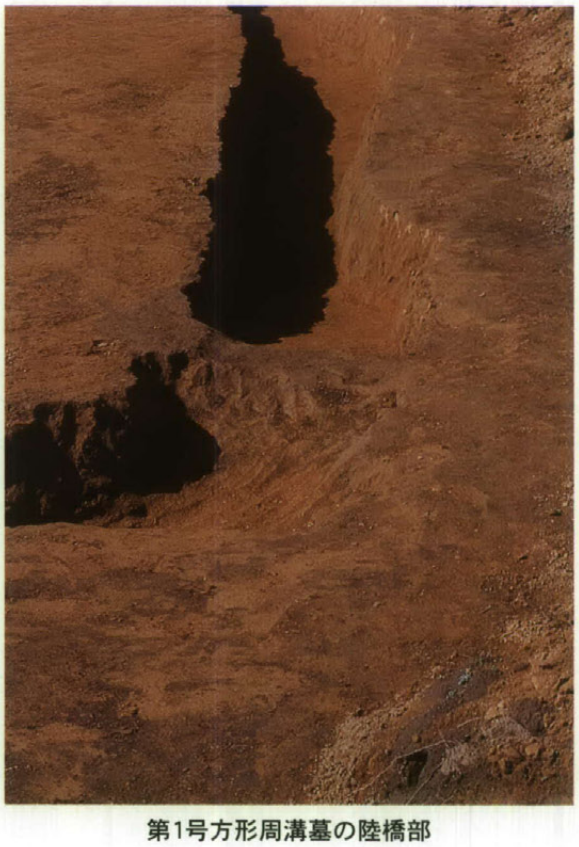


第1号方形周溝墓の北溝（西側より眺む）



第1号方形周溝墓の西溝（南側より眺む）

第1号方形周溝墓の東溝（南側より眺む）



第1号方形周溝墓の陸橋部

序

今日「グリーンツーリズム」という言葉に象徴されますように、山麓・山間地を主体にしている農村部には、豊かで個性を強く打ち出す方策が叫ばれています。そうしたなか、地域の歴史や自然景観、伝統文化が見直され、これらをキーワードと打ち出した村づくりが各地に展開されています。

これらが果たす役割が地域に於て如何に重要であるかを如実に物語っており、その保護・保存は現代に生きる者の重大な責務であることを改めて実感させてくれます。

「まこもが池遺跡」のある富県地区では「とみがた郷づくり構想案」を策定して、地域の活性化に積極的に取り組んでいます。

本書で取り扱う「まこもが池遺跡」周辺には長野県史跡に指定されている「御殿場遺跡」及び中世伝説を語るのに欠くことのできない「真菰ヶ池の鴛鴦伝説」の伝承地が、さらには、多くの中世城館跡が存在しており、古くより人間の営みが実証化されている地域であります。このように歴史的な環境が備わっていることからしても先に述べた「グリーンツーリズム」運動を推進することについて最適地と思われます。

伊那市土地開発公社が富県団地造成事業を導入するとのことから、伊那市教育委員会は緊急発掘調査を実施しました。その結果おかげさまで、伊那市内では極めて珍しい弥生時代後期の方形周溝墓が２基検出され、これらを踏まえた上での「村づくり」を発展させれば良い成果が得られることと存じます。

本報告書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となれば、この上ない喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多大なる御理解と御協力をいただきました伊那市土地開発公社、及び御指導・御鞭撻を賜りました関係各位に深甚なる感謝を申し上げますとともに、引き続きのお力添えをお願い申し上げます。

平成14年３月１日

伊那市教育委員会

教育長　保　科　恭　治

例　言

1．本書は、富県宅地造成事業に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。

2．この緊急発掘調査は伊那市長の委託により、伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団を編成し、それに事業を委託して実施した。

3．本調査は、平成13年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

本田秀明　　飯塚政美

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図　　本田秀明　　飯塚政美　　髙松慎一

・土器及び石器実測図　　本田秀明　　飯塚政美

・土器拓影　　本田秀明

◎写真撮影者

・発掘及び遺構　　飯塚政美　　本田秀明

・遺　　物　　飯塚政美　　本田秀明

5．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6．出土遺物、遺構図及び実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

目　次

口　絵
序
例　言
目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　まこもが池遺跡とその環境…… 6
第１節　位置と地形…… 6
第２節　周辺の歴史的環境…… 6
第３節　遺跡の概要…… 8
(1)　調査によって検出された遺構と遺物…… 8
(2)　住居址出土の遺物について……10

第Ⅱ章　発掘調査の経過……11
第１節　発掘調査に至るまでの経過……11
第２節　発掘調査の組織……11
第３節　発掘調査日誌……12

第Ⅲ章　発掘調査……14
第１節　調査の概要……14
第２節　遺構と遺物……15
(1)　縄文時代の遺構と遺物……15
(2)　トレンチ内出土の縄文時代の遺物……16
(3)　弥生時代の遺構と遺物……19
(4)　トレンチ内出土の弥生時代の遺物……20

第Ⅳ章　所　見……23

挿 図 目 次

第１図　春富地区の遺跡分布図 …… 7
第２図　まこもが池遺跡検出の住居址実測図 …… 9
第３図　まこもが池遺跡検出の住居址出土土器実測図 ……10
第４図　地形及び遺構・トレンチ配置図 ……14
第５図　第１号土坑実測図 ……15
第６図　第１号土坑出土石器実測図 ……15
第７図　第２号土坑実測図 ……15
第８図　第３号土坑実測図 ……16
第９図　第３号土坑出土土器拓影 ……16
第10図　トレンチ内出土土器拓影 ……16
第11図　トレンチ内出土石器実測図 ……18
第12図　トレンチ内出土石器実測図 ……19
第13図　第１号方形周溝墓実測図 ……20
第14図　第１号方形周溝墓出土遺物分布図 ……21
第15図　第１号方形周溝墓出土土器実測図 ……21
第16図　第２号方形周溝墓実測図 ……22
第17図　第２号方形周溝墓出土土器拓影 ……22
第18図　トレンチ内出土土器拓影 ……22

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景
図版２　発掘調査状況
図版３　発掘調査状況及び遺構
図版４　遺構
図版５　遺構
図版６　遺構及び遺物出土状況
図版７　出土遺物

第Ⅰ章　まこもが池遺跡とその環境

第１節　位置と地形

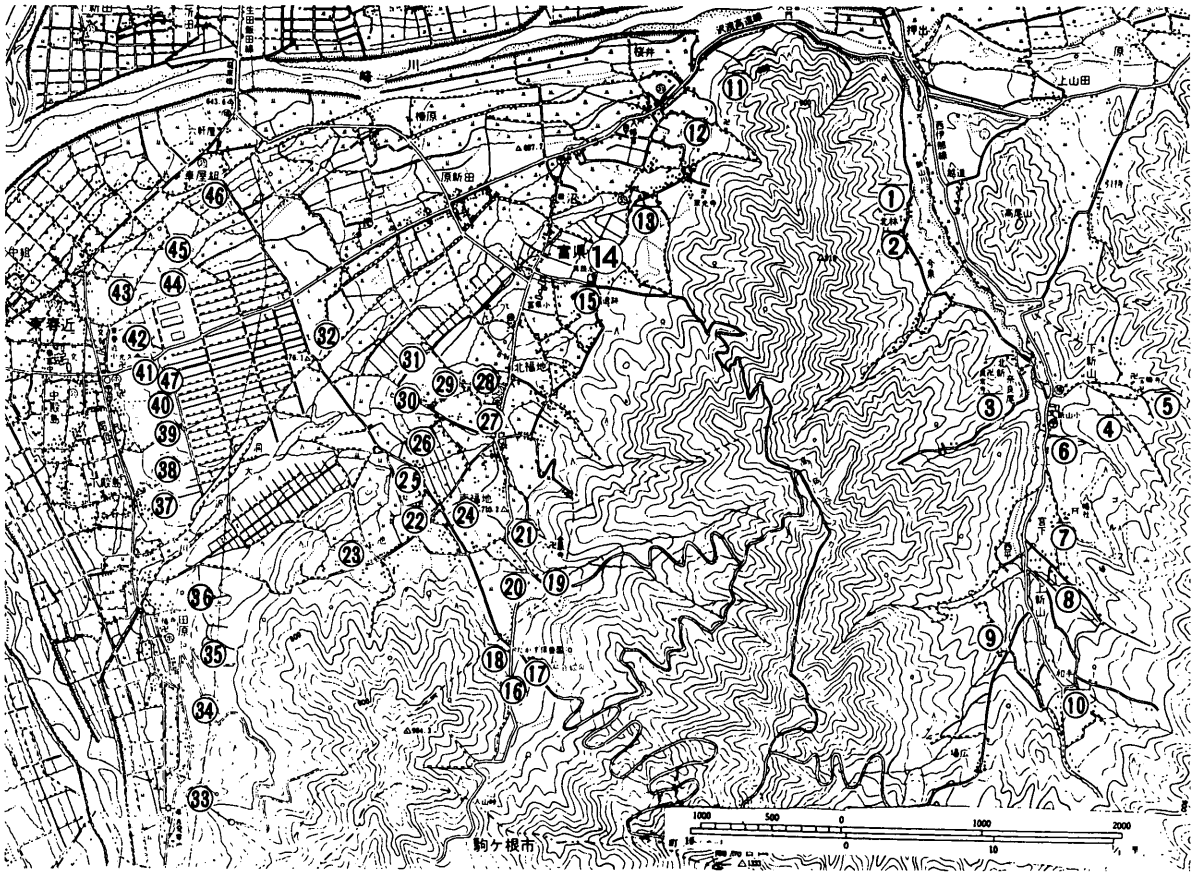
まこもが池遺跡は長野県伊那市富県貝沼下中島集落の北東端に位置している。本遺跡地に至るまでの経路の最短距離は、ＪＲ飯田線伊那市駅を下車して、東へ500m程県道を行くと天竜川に架かる「中央橋」にぶつかる。さらに、この橋を渡って東へ1km程行くと三峰川に架かる「竜東橋」に至る。この橋を渡って1km程東へ行くと、三峰川左岸第一河岸段丘面が広く展開し、大部分の土地が水田に利用されている。

この段丘面を横切って、さらに東へと歩を進めて行くと、途中に榛原集落の家並みが点在しこの集落の東端部に比高数mの低い河岸段丘が南北に走行している。これを登り切った平坦面が三峰川第二河岸段丘面であり、原新田集落が割合に密集して農村村落を形成している。この村落の中心部に農村地帯では珍しい信号機が設置され、周辺は徐々ではあるが宅地化の波が押し寄せてきている。さらに、東方へ2km程度進むと、わずかな河岸段丘に達し、登り切った所が三峰川第三河岸段丘面であり、眼前に伊那市立富県小学校の校舎が見え、この地点で、左折して500m程北進した三叉路を右に折れたやや高台一帯がまこもが池遺跡である。

第２節　周辺の歴史的環境

今回、緊急発掘調査を実施したまこもが池遺跡は、先述したように伊那市富県貝沼下中島の一角に含まれている。当地方は広域的に見て、かつて、千年程前に編纂された『倭名類聚鈔』の中に記載されている「信濃国伊那郡福智（布久知）郷」の存在した付近であると推測されている。『上伊那誌歴史篇』によればこの郷について次のように述べている。「布久地と訓み、今も伊那市富県に南福地・北福地の地名が残っている。郷の境をどこにするか、ということは勿論明確にはできないことで、福地を中心にして自然地形などで区画されたおよそ50戸の範囲とするより他ないのであるが、およそ、北は三峰川、西は天竜川が境となり、河南、東伊那、中沢までを含めた地域が考えられ、桜井、貝沼の字「角地前」から緑釉陶器の坏が発見されている点などから、ある時期にはこの集落辺に福智郷の中心があったのではないかと推定されるが、最近になって東伊那栗林から出土した帰化人系統とみられる遺物の発見があり、この地点にもまた、この郷の一つの中心的集落が発達していたのではないかと思考される。何れにしてもこの郷を支配した郷長の存在を考えねばならないが、それが何処であったかを早急に推定することは、他の郷の場合と同様に相当に困難なことといわねばならない。」

伊那市東春近の「春」、伊那市富県の「富」をそれぞれ採用し、両地区を総称して「春富地区」と呼称している。この地区で今までに確認された遺跡数は全部で47カ所あり、そのうち発掘調査が実施されたのは③奈良尾、④芝王、⑤舟ヶ洞、⑦宮原、⑭まこもが池、⑮御殿場、⑳根木谷中畑、㉔小御堂、㉕阿原古墳、㉛三ツ木、㊷宮場間様古墳群、㊻上原、㊼殿島城跡の13



第１図　春富地区の遺跡分布図

遺跡の名称

●富　県

①　北林	②　今泉	③　奈良尾	④　芝王
⑤　舟ヶ洞	⑥　中平	⑦　宮原	⑧　合の原
⑨　小松	⑩　和手	⑪　大塚古墳	⑫　上垣外
⑬　宮の花	**⑭　まこもが池**	⑮　御殿場	⑯　菖蒲平古墳
⑰　手間手古墳	⑱　手間手ドウセギ古墳	⑲　根木谷古墳	⑳　根木谷中畑
㉑　手間手	㉒　不幸路	㉓　八人塚	㉔　小御堂
㉕　阿原古墳	㉖　高岱	㉗　蚕玉古墳	㉘　羽根原
㉙　羽根田古墳	㉚　駒合古墳	㉛　三ツ木	㉜　駒ヶ原

●東春近

㉝　瀬戸古墳群	㉞　男塚古墳	㉟　宮の上古墳群	㊱　社宮司古墳
㊲　田原寺坂古墳群	㊳　古寺古墳群	㊴　洞古墳群	㊵　火沢古墳群
㊶　本城古墳群	㊷　宮場間様古墳群	㊸　老松場古墳群	㊹　下原
㊺　中原	㊻　上原	㊼　殿島城跡	

カ所である。特に南福地、北福地の数多くの古墳は大部分、盗掘されてしまっている。

遺跡の分布状況は南アルプス（通称、赤石山脈）の前山である伊那山地より流れ出す大小様々な河川や、山麓扇状地上に数多く存在している。①から⑩は新山川の河岸段丘面上に発達しており、出土した遺物より時代は縄文早期から近世にまで至っている。⑪から㉛は三峰川の第三河岸段丘面と伊那山地より発達した複合扇状地上に存在している遺跡群である。

御殿場遺跡は過去、数回にわたって緊急発掘調査が行われ、数多くの縄文中期の竪穴住居址が検出され、それに付随する莫大量の土器・石器が出土している。なかでも、顔面付釣手形土器は国の重要文化財に指定され、全国各地は当然として、海外の主要な展覧会にはその度に出品している。さらに、美術史関係、歴史関係の出版物には必ずといってよい程に一頁を飾っている現状である。加えて、御殿場遺跡は県史跡に指定され、一部は伊那市が買収して史跡公園化をこころみ、この中に縄文中期を想定した竪穴住居址の一棟を復元して一般公開に供している。

三ツ木遺跡は縄文早期押型文土器を多量に出土した遺跡として全国的に名をとどろかせている。

第３節　遺跡の概要

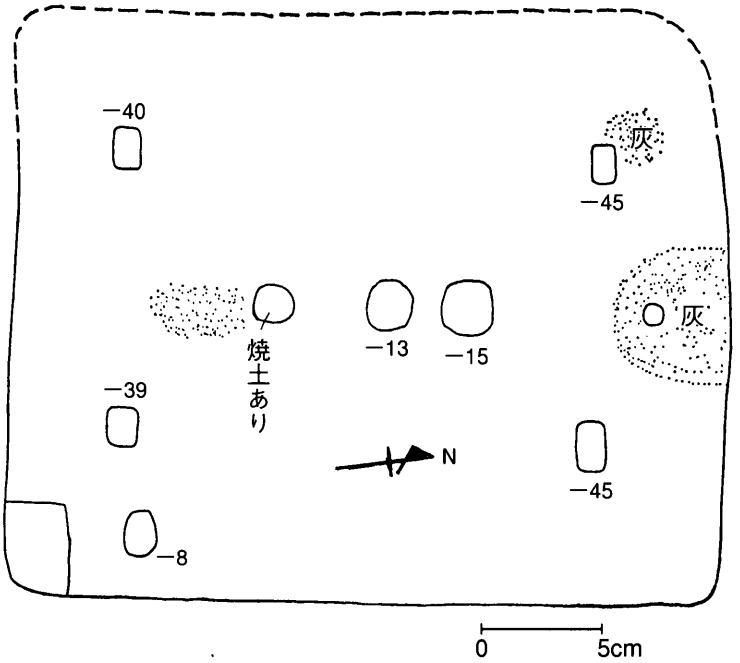
まこもが池遺跡は過去に一度、緊急発掘調査を実施して、その存在を世に知らしめしている。この調査結果については太田保氏が「伊那市富県貝沼弥生時代住居址調査覚書」（『伊那路』第16巻第６号 通刊第185号 昭和47年６月号）の題で詳細に述べられており、その経過内容を全面的に引用して記す。太田保氏は貝沼弥生時代遺跡として把握してはいるが、位置的にみて「まこもが池遺跡」に該当すると思われる。

「貝沼弥生時代遺跡調査は、昭和41年１月より行われていた伊那市春富土地改良区が実施した開田工事にともない遺跡の所在を確かめたので記録保存の措置として昭和41年２月27日、雪天により、開田工事の休日に緊急調査を行ったものである。遺跡は御子柴泰正氏により発見され、調査は伊那市教育委員会が主体で、吉原社会教育課長・保坂係長・酒井富県公民館長・伊藤富県公民館主事と太田が調査を行った。池の窪一帯はすでに昭和39年から40年にかけて伊那市春富土地改良区によって開田工事が行われて、広範囲にあった先史・原始時代の遺跡が保護・記録のないままに破壊されてしまい、今回調査できたのは、この遺跡でも最末端にあった住居址である。」

（１）調査によって検出された遺構と遺物

これについても前述した「伊那市富県貝沼弥生時代住居址調査覚書」によっていることを書き綴っておく。「第２図によればまこもが池遺跡の弥生時代住居址は、昭和41年３月に実施された「御殿場遺跡」と同一台地にあり、伊那市立富県小学校北側約200m、西北に傾斜した台地の先端にある。遺跡は開田工事のためのブルトーザーによって表土を削り取られたあと露出

したローム層に数カ所の黒土の落ち込みがあり、その一カ所から弥生式土器が発見され調査を行ったもので、50cmに近い大雪が前日に降りそれを掻いてから発掘調査を行った。黒土の落ち込みを発掘すると、敲き固めた硬い床面を発見し、住居址北側から甕形土器を火壺にした埋甕式の炉址も発見された。



第２図　まこもが池遺跡検出の住居址実測図

住居址は西側の壁をブルトーザーによって削り取られて不明な点があるけれども、南北６ｍ、東西4.8ｍの長方形四主柱の住居址であった。

まこもが池遺跡の弥生時代住居址は、ブルトーザーによって住居址の上部を削り取られてしまったので不明であるけれども、東壁ではローム層に約10cm垂直に掘り込み、北側炉址の付近ではわずか3cmしか残らず、壁を確認できる程度であり、西壁では、床面まで削り取られてしまったけれども、四主柱が確認できたことから、まこもが池遺跡の住居址は、おそらく四主柱は壁から約１ｍ内側に幅25cm前後、長さ35～40cmの角材をローム層中に40～50cmを掘って垂直に建てて主柱としたものである。

住居址には、北側の二主柱中央40cm、外側に口縁径19.4cmの甕形土器の底部を割り取った土器の口縁部を床面と平に埋めて火壺にした埋甕炉が造られた。埋甕炉内は上部に強い火を受けたあとがあったけれども、胴部から底では、細かい黒土が入っていた。炉址から北壁側まで火を使って受けた赤色で固く焼けた床面があった。

この住居址には、四主柱の中央部、南北にピットが三個発見している。一番北のピットは埋甕炉から１ｍ南、直径25cm、深さは約15cm、約30cm南に一個約60cm間をおき一個あり、そのピット列の囲りの床面は敲きも少なくこの住居址内では柔らかい床面の部分であり、この柔らかな床面は南側主柱間まで続いていた。

住居址には南東壁隅に東西67cm、南北51cm、深さ28cmのピットと、南東主柱の東側壁寄りに40cm×25cm、深さ8cmのピットがあった。」

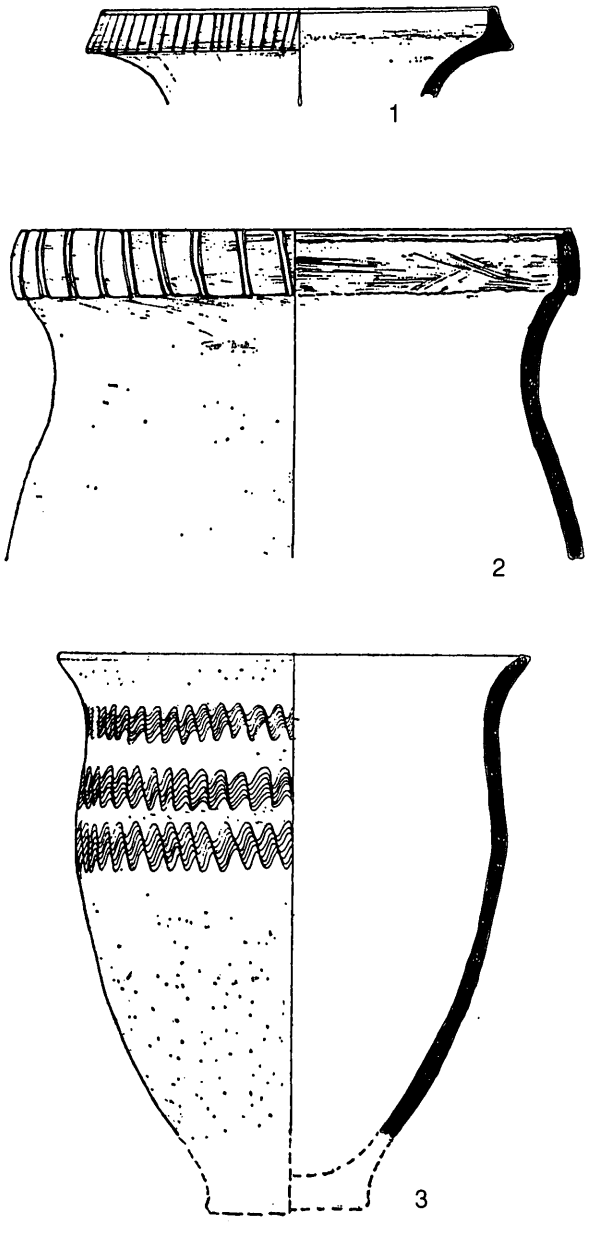
前述した弥生時代住居址の遺物について「覚書」に基づいて全面的に述べる。炉址の火壺に使用した甕形土器のほかに、壺形土器の口縁部破片と別個体の胴部小破片が東壁に張りついて出土し、広口土器の複合口縁の破片が住居址中央ピット列北側床面上から出土した。住居址上

層部をブルトーザーで掘り削り取られてしまわなければ、もっと多くの遺物を保存していた住居址であったと感じさせられた遺構であった。

（2）住居址出土の遺物について

（第3図の1）は、図上復原により口縁径17cmの小形壺形土器の複合口縁部である。大きく外反してL字状に立ち上がった口唇部直下の口壁に細く浅い沈線文を篦状工具にて縦に施文する。細くくびれた口縁部から胴部にかけて篦状工具で縦に整形しているけれども光沢がないのは、土器の胎土が小粒な砂を多く混入しているためであろう。複合口縁部の内壁や口頸部は外反部に細い平行線が見られるものは整形がよく行われている現象であろう。

（第3図の2）は、精選して細かい良質な粘土で焼成した。複合口縁を有する広口甕形土器である。胴部からわずかに頸部でしまり、ゆるいカーブの外反から段をして内弯する。間をおいた幅5mmの角状工具で縦に施文した沈線文を複合口縁部に施文したのみで、頸部から胴上部にかけ刷毛状工具で器壁を整形した痕が浅く、細く条線が横に残っている。赤褐色に焼かれ、口縁径22cm、器厚5mm～7mmを計測できる甕形土器。



第3図　まこもが池遺跡検出の住居址出土土器実測図（1：3）

（第3図の3）は炉址の火壺に使用されていた口縁径は19.4cm、現器高は19cm、器壁厚は5mm～7mm程度をそれぞれ計測できる甕形土器である。細かいヘラで整形しているけれども強く二次的な熱を受けて非常にもろくなっている。

胴部からわずか細くしまる頸部からゆるく外反する口縁部、胴上部から長い胴部で、口径の約2分の1の底部にしまる甕形で、口唇部は丸味を呈し、口縁から頸上部を横位に、胴部に細い刷毛目痕が斜行した姿が残存している。篦状工具で器壁を整形したあとに、幅12mm～14mmの7本歯の櫛状工具による波状文を頸部から胴上部に三帯施文してある。

（本田秀明）

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経過

今回、発掘調査の該当地となったまこもが池遺跡は富県宅地造成事業に伴う緊急発掘調査であり、調査が実施されるまでには各種の保護協議、事務上の手続きが実施され、それらの動きを年月日の順に従って記しておくことにする。

平成13年９月25日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結する。

平成13年11月12日付けで、まこもが池遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成13年11月12日付けで、まこもが池遺跡埋蔵物発見届の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成13年11月12日付けで、まこもが池遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

平成13年12月20日付けで、友野良一前遺跡発掘調査団長の死亡にともない遺跡発掘調査団長を御子柴泰正に変更する。

第２節　発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	登内　孝	
委員長代理	小坂栄一	（平成13年12月21日まで）
〃	上島武留	（平成13年12月22日から）
委員	伊藤晴夫	
〃	田畑幸男	（平成13年12月22日から）
教育長	保科恭治	
教育次長	伊藤　隆	
事務局	塚本哲朗	（社会教育課長）
〃	伊藤初美	（副参事・社会教育課長補佐・女性室長・青少年係長）
〃	白鳥今朝昭	（社会教育課長補佐・社会教育係長）
〃	田原節子	（社会教育青少年係）
〃	飯塚政美	（社会教育係）
〃	牧田としみ	（社会教育係）
〃	高松慎一	（社会教育係）

発掘調査団

団　　長　友野良一（日本考古学協会会員）（平成13年12月19日まで）
〃　　御子柴泰正（長野県考古学会会員）（平成13年12月20日から）
調査員　飯塚政美（日本考古学協会会員）
〃　　本田秀明（長野県考古学会会員）
〃　　髙松慎一（上伊那郷土研究会会員）
作業員　城倉三成　織井和美　酒井公士郎　有賀秀子　小田切守正（敬称略順不同）

第3節　発掘調査日誌

平成13年9月25日㈫　伊那市考古資料館にて発掘機材、測量機材の点検、整備を実施して発掘調査に万全を期す。

平成13年9月26日㈬　発掘現場へ発掘機材一式を運搬する。スペースハウス・コンテナハウスを建てる場所を選定し、その場所をバックフォーにて整地を行う。

平成13年9月27日㈭　トレンチを設定する。設定の仕方は用地内の南側から東西に長く、第1号トレンチと命名し、以下、北側へ行くにしたがってトレンチの号数を増やしていく方式を採用する。結果的に第24号トレンチまでとなる。

平成13年9月28日㈮　コンテナハウス内にて道具の整備をする。

平成13年10月2日㈫　第1号トレンチ、第2号トレンチを掘り進めると、基盤は東から西への傾斜があるのが分かった。水田の地場層の下はほとんど動いていなかった。若干の土器片が出土した。

平成13年10月3日㈬　トレンチ掘りを進める。

平成13年10月9日㈫　昨日に引き続きトレンチ掘りを実施する。

平成13年10月11日㈭　用地内の北側に寄った付近、第16号トレンチから第21号トレンチにかけて周溝を検出する。それの規模確認のために拡張を進める。

平成13年10月12日㈮　溝は方形周溝墓になり、第1号方形周溝墓と命名し、掘り進めていくと、溝の中より弥生土器片と人骨片が出土した。

平成13年10月15日㈪　第1号方形周溝墓の溝を掘り進めていくと、溝底のレベルは様々であった。

平成13年10月16日㈫　第1号方形周溝墓を5つのセクションベルトを残してほぼ掘り終える。全般的にみて遺物の出土量は少なかった。

平成13年10月19日㈮　第1号方形周溝墓に残された5つのセクションベルト土層図の作成。それの図面を取り終えたのからベルトを取り除く。

平成13年10月24日㈬　第1号方形周溝墓の全掘を終える。

平成13年10月25日㈭　第15号トレンチ東西通しのセクション図作成。第1号土坑、第2号土

坑、第３号土坑それぞれのセクション図を取る。第１号トレンチより北側へ向かって順次トレンチの埋め戻しを開始する。

平成13年10月26日㈮　第１号方形周溝墓の遺物ドットマップ図作成。同じ遺構の実測完了。第１号土坑、第２号土坑の完掘及び写真撮影終了。トレンチの埋め戻しを進める。

平成13年10月30日㈫　第１号方形周溝墓の清掃を終え、写真撮影を済ませる。

平成13年11月１日㈭　第２号方形周溝墓の掘り下げを完了する。それのセクション図を完成。

平成13年11月２日㈮　第２号方形周溝墓及び第３号土坑の全掘完了。前記の二つの遺構の実測終了。

平成13年11月５日㈪　第２号方形周溝墓、第３号土坑の清掃をして、写真撮影を終えて、埋め戻しをする。

平成13年11月７日㈬　埋め戻しをする。

平成13年11月９日㈭　埋め戻しを終え、発掘機材の撤収、運搬を完了する。本日を持って現場の発掘調査を閉じる。

平成13年11月～平成14年２月　図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、３月の報告書刊行に努力を払った。

平成14年３月　報告書を刊行し、本事業の完了をみた。　（飯塚政美）

発掘風景

発掘風景

第Ⅲ章　発掘調査

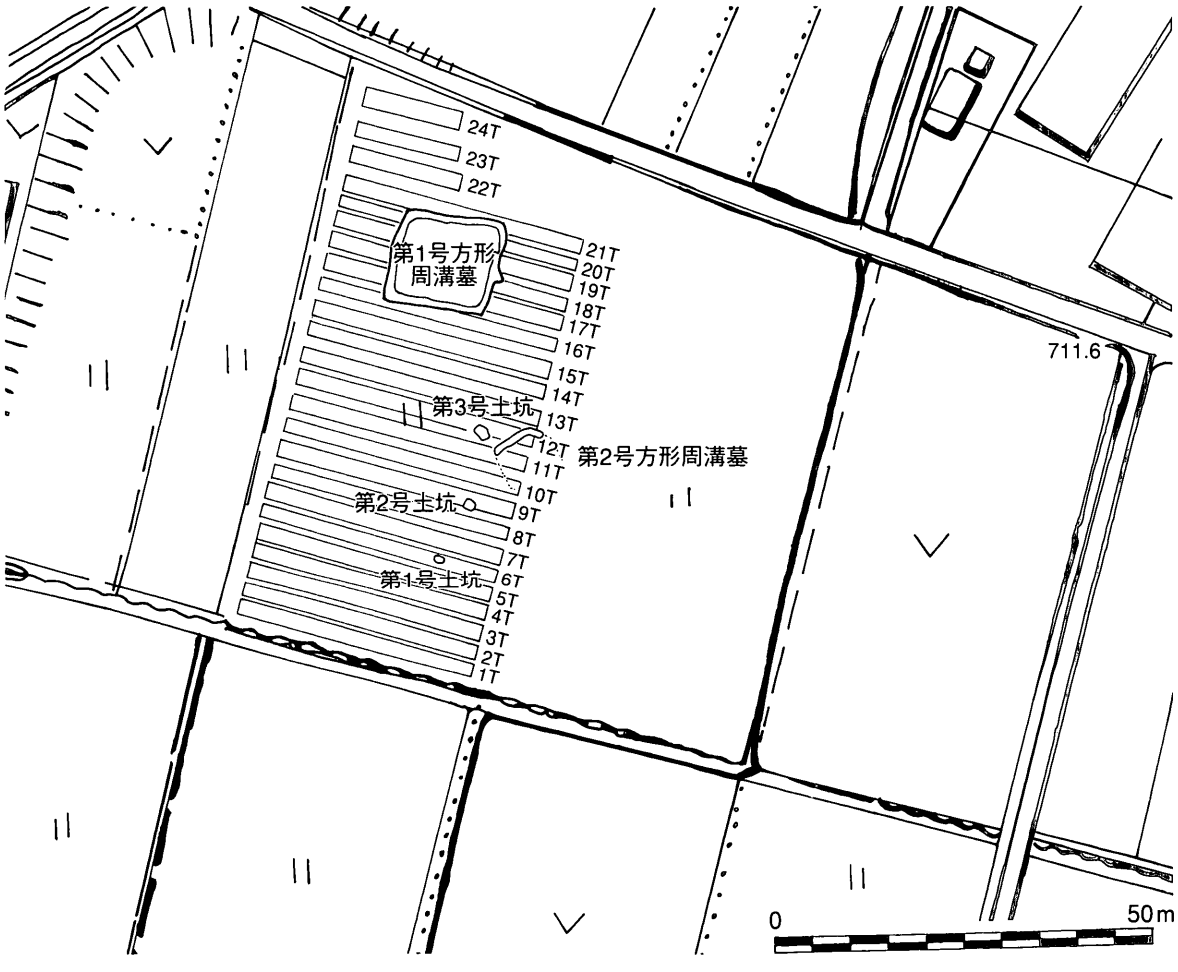
第１節　調査の概要

まこもが池遺跡周辺は昭和41年度に実施された土地改良事業によって整然と区画整理された水田地帯が広く展開しており、必然的に農振農用地域に指定されている。本遺跡はこの土地改良事業実施に先立って、緊急発掘調査が行われ、第Ⅰ章　まこもが池遺跡とその環境で前述したような成果があった。いわばこれが第Ⅰ次調査であった。

この経緯を踏えてみるに、今回は第Ⅱ次調査になるのである。

遺跡地の発掘調査地点は水田となっていたので、発掘調査を実施するに当たっては、当初、水田造成時に移動した土の状態、特に埋土の状態を充分に観察し、現地に重機を入れて発掘調査に踏み切った。

調査結果は『発掘調査報告書』の通りである。今回、検出された２基の方形周溝墓は伊那市内では大変珍しく、下伊那を含めた天竜川流域での広範囲的での文化交流の足跡が実証された事実の一つとなった。



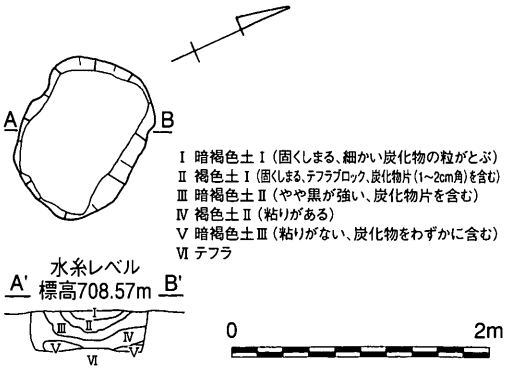
第４図　地形及び遺構・トレンチ配置図

第２節　遺構と遺物

（１）縄文時代の遺構と遺物

第１号土坑（第５図　図版３）

本土坑は第６号トレンチの東側に近い付近で検出され、表土層面より50cm程度下層のソフトテフラ層を掘り込んで構築され、南北1m20cm位、東西95cm位の規模を有し、部分的に凹凸は見られるが、平面プランは大般、長円形状と判別してもよかろう。壁は30cm前後と測定でき、ほぼ垂直状を呈し、良好である。

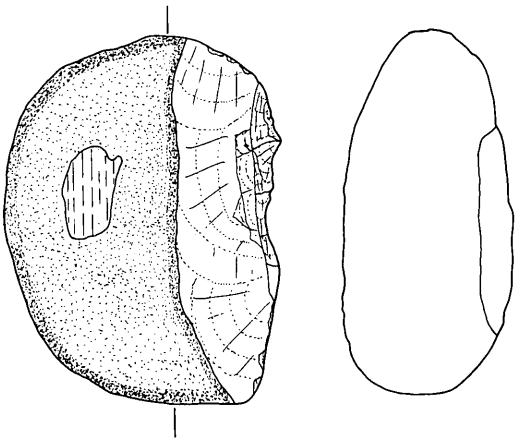


第５図　第１号土坑実測図

底面はわずかに凹凸を認め、堅い叩き状を成している。第６図の石器よりみて本土坑は縄文中期頃と思われる。

遺物（第６図）

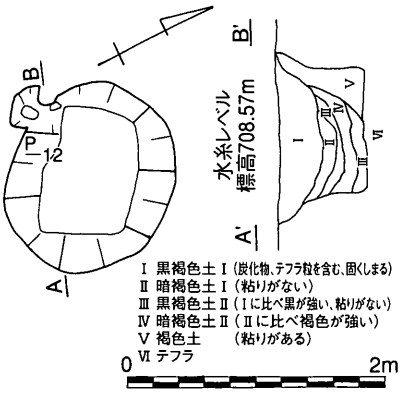
本図に掲載したのは未完成品の円礫の石器であり、従って何の使用目的であったかは不明である。ただ、円礫の中央部付近に不整円形状に磨いた痕跡を認め、右側半分はきれいに打ち欠いている。周縁部に炭化物が付着していたが、何を意味しているかは分からない。石質は三峰川産の緑色岩である。



第６図　第１号土坑出土石器実測図（１：３）

第２号土坑（第７図　図版４）

本遺構は第９号トレンチの東側に近い付近で検出され、表土層面より55cm程下がったソフトテフラ層を70cm程度掘り込んで構築してある。平面プランは若干の凹凸を認めるが、全般的に、上面は円形状を、底面及び底面付近は面取りした長方形状を呈している。



第７図　第２号土坑実測図

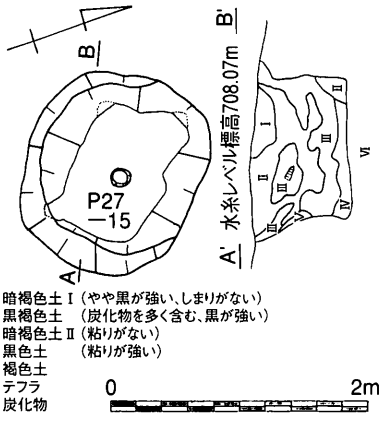
規模は南北1m30cm程度、東西1m50cm程度を、壁は70cm～75cm程度をそれぞれ測る。壁面の状態は外傾気味で、凹凸が多く、上部はソフトテフラ層、中・下部はハードテフラ層より組成されている。

底面はわずかに凹凸があり、堅い叩きを呈している。遺物の出土は何もなかったが、形態的に見て本土坑は縄文中期頃と思われる。

遺物　遺物の出土は何もなかった。

第３号土坑（第８図　図版４）

この土坑は第12号トレンチの東側、第２号方形周溝墓に近接して発見された。表土面から85cm位下がったソフトテフラ層を掘り込んで構築してある。平面プランは上面で若干角張ってはいるが、全般的には円形状、底面のそれは長方形状を成している。規模は南北1m40cm程度、東西は1m50cm程度を、深さは75cm位が測定可能である。壁面の状態は次のようである。



第８図　第３号土坑実測図

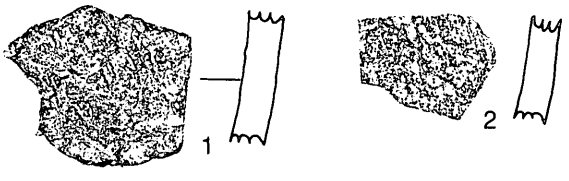
東壁――中・下段が膨らみ、やや堅い。西壁――垂直に近く、やや堅い。南壁――外傾気味で、やや堅い。北壁――凹凸が多く、やや堅い。壁面の組成土は上部でソフトテフラ層、中・下部はハードテフラ層であった。

底面は大般平坦で、堅い叩き状となっており、それの中央部付近には深さ25cm程度の小ピットが穿けられており、直接的に本遺構と結び着くかは疑問である。

本遺構は遺物より見て縄文中期後葉と思われる。

遺物（第９図）

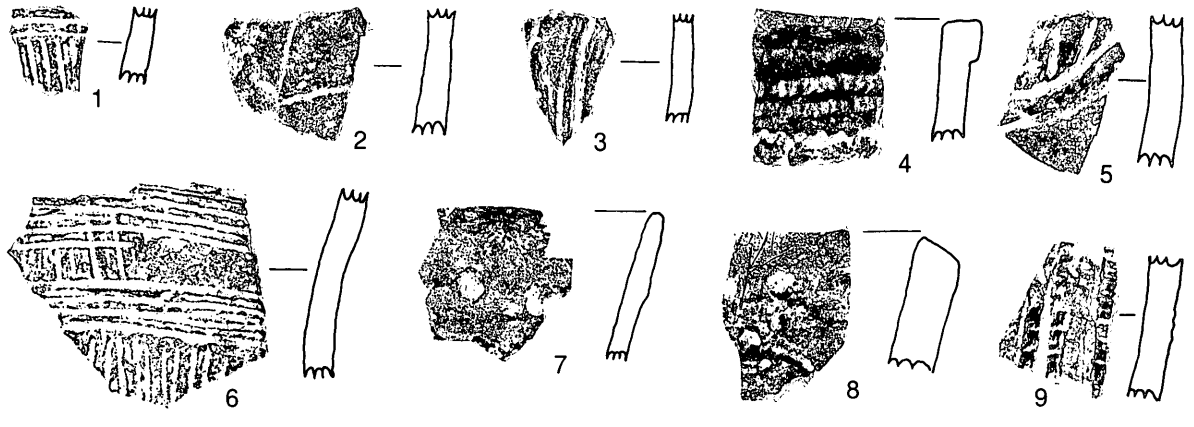
第９図（１～２）はともに外面の土器文様は剥落してしまっているので、時期の判別はよく分からない。器厚や胎土の状態からみて、縄文中期後葉の加曽利Ｅ式の一派かと思われる。（１～２）は同一個体であり、茶褐色を呈し、焼土は中位で、少量の長石粒を含む。



第９図　第３号土坑出土土器拓影（１：２）

（２）トレンチ内出土の縄文時代の遺物

ここで取り扱うのは第10図の土器、第11～12図の石器である。まず、最初に第10図から述べていく。（１）は第７号トレンチ、（２～３）は第８号トレンチ、（４～５）は第10号トレンチ、



第10図　トレンチ内出土土器拓影（１：２）

（6～7）は第14号トレンチ、（8～9）は第15号トレンチよりそれぞれ出土している。（1、6）は沈線文を縦と横に交互に配列して文様効果を増している。これらは縄文中期初頭の後葉から縄文中期中葉の初頭頃によく見られる。沈線の走りが単純なもの（1）、それが一部分にわたって無いもの（6）とに細分化され、わずかな時期差があるものと思われる。（1）は赤褐色を、（6）は薄茶褐色を呈し、焼成は両片とも良好である。胎土中に少量の雲母（1）、多量の長石粒（6）をそれぞれ含んでいる。

（2）は斜縄文地へ細くて、鋭い沈線を縦位状と斜位状に走らせ、文様に変化を持たせ、装飾的効果をかもし出す一工夫であろう。この施文はよく縄文中期初頭にみられる手法の一つで、よく観察すべきである。茶褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に多量の雲母を含むために、器の両面はピカピカと輝いていた。

（3）は無文地に沈線を弧状に組み込んだ細片であり、文様としての体裁をわずかに保っている。これは縄文中期後葉の土器文様の一つであると思われるが、もう少し大きな破片が欲しいものである。

（4）は口唇部が平坦で、かつ、口縁上部は肥厚化を呈しながら、無文帯を形成している。破片中部は連続刻目文を二本帯状に横走させ、さらに下部は連続刺突文を横位状に押捺してあり、いわば三つの文様帯によって成り立っていることが分かる。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含んでいる。これは縄文中期中葉に隆盛する文様の一つであろう。

（5）は通称、櫛形文土器と呼ばれている一派であり、従って、縄文中期中葉に編年づけられている。赤褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含んでいる。

（7）は縄文中期初頭の薄手式土器の一派であり、無文地へ点列文を横捺してある。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母粒と長石粒を含んでいる。

（8）は口唇部が外傾する口縁部破片で、縄文中期中葉に見られる極めて厚い土器片である無文帯が全面を覆いつくしていて、あまり見ばえは良くない。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石、雲母を含んでいる。

（9）は低くて、頂部が平たい隆帯を数条にわたって縦位状に施し、その上に比較的に規則性を保ちながら連続刻目文を押捺してある。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石粒を含む。縄文中期中葉頃に位置づけられる。

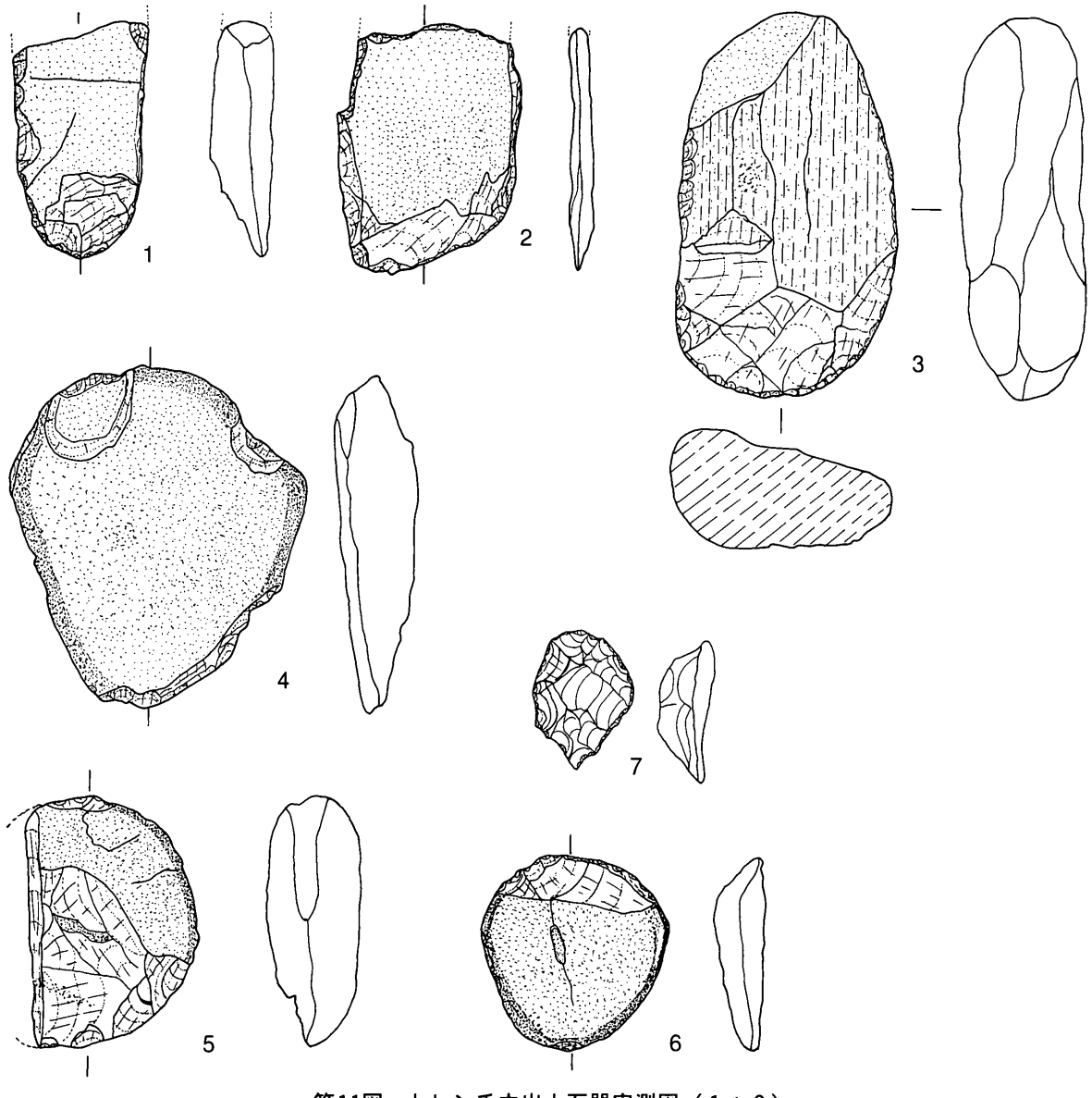
（第11～12図）はトレンチ内出土の石器である。そのうち、第11図に掲載されているのを先に述べることにする。（1、7）は第10号トレンチ、（2）は第15号トレンチ、（3）は第12号トレンチ、（4）は第16号トレンチ、（5）は第14号トレンチ、（6）は第9号トレンチ内よりそれぞれ出土している。石質は（7）の黒耀石を除いて、他の6個は全て硬砂岩製である。

（1～2）の上端部は欠損しているが、打製石斧の一派と思われ、（1）は短冊形でやや分厚く、一方、（2）は薄く、撥形のそれぞれ違った形態を成している。ともに縄文中期の所産であろう。

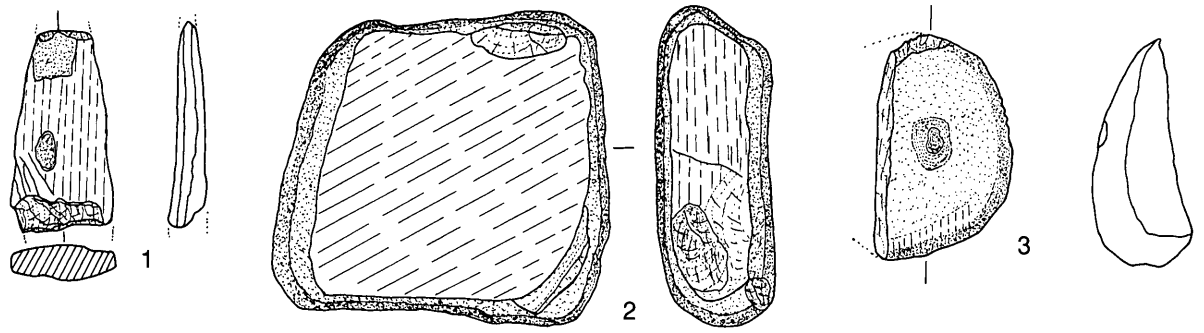
（3）の下端部は打ち欠いて敲石として用い、上端の右側半分から中端の右側半分にかけては砥石のように利用しており、いわば二つの用途を兼ね備えている特殊な石器と思われる。これも縄文中期の所産であろう。

（4、6）は円礫を半分に割って、切片を製作し、その一部分に刃を付けて使用する横刃形型石器の一種と推定され、縄文中期に多用されている。そのうち（4）は大型であるのに対し、（6）は小形である。（5）は円礫を打ち欠いた礫器の仲間と思われ、縄文中期の所産である。（7）は周縁に小さな剥離を施し、刃部を成している皮剥の一種と思われる。

第12図（1～3）は全て第17号トレンチ内より出土しており、ともに縄文中期頃に製作されたと推定される。（1）は小形の定角式磨製石斧で、緑色岩を利用している。（2）は緑色岩の一面が丁寧に磨いてあり、砥石に利用されたのであろう。（3）は緑色岩の円礫を用いて、中央部に小円形状の浅い凹みを設けたもので、通称、これらを凹石と呼んでいる。



第11図　トレンチ内出土石器実測図（1：3）



第12図　トレンチ内出土石器実測図（１：３）

（３）弥生時代の遺構と遺物

第１号方形周溝墓（第13図　図版５　口絵１・２）

本遺構は第16号トレンチの中央部付近から、第21号トレンチの中央部付近にかけての広い範囲にわたって検出された。規模は本来、方形周溝墓の意味する点からみて、当然ながら周溝外縁からの測定値が採用され、それは東西14m60cm程度、南北13m10cm程度である。各溝の説明については方位に基づいて、北溝、西溝、南溝、東溝と命名しておくことにする。これらの周溝は北溝で表土層面より50cm位、南溝でも90cm位下層のソフトテフラ層面を掘り込んで構築してあり、西溝と東溝は先の数値の中間くらいを示している。このことは地盤が大きく、北から南へ傾斜しているためである。

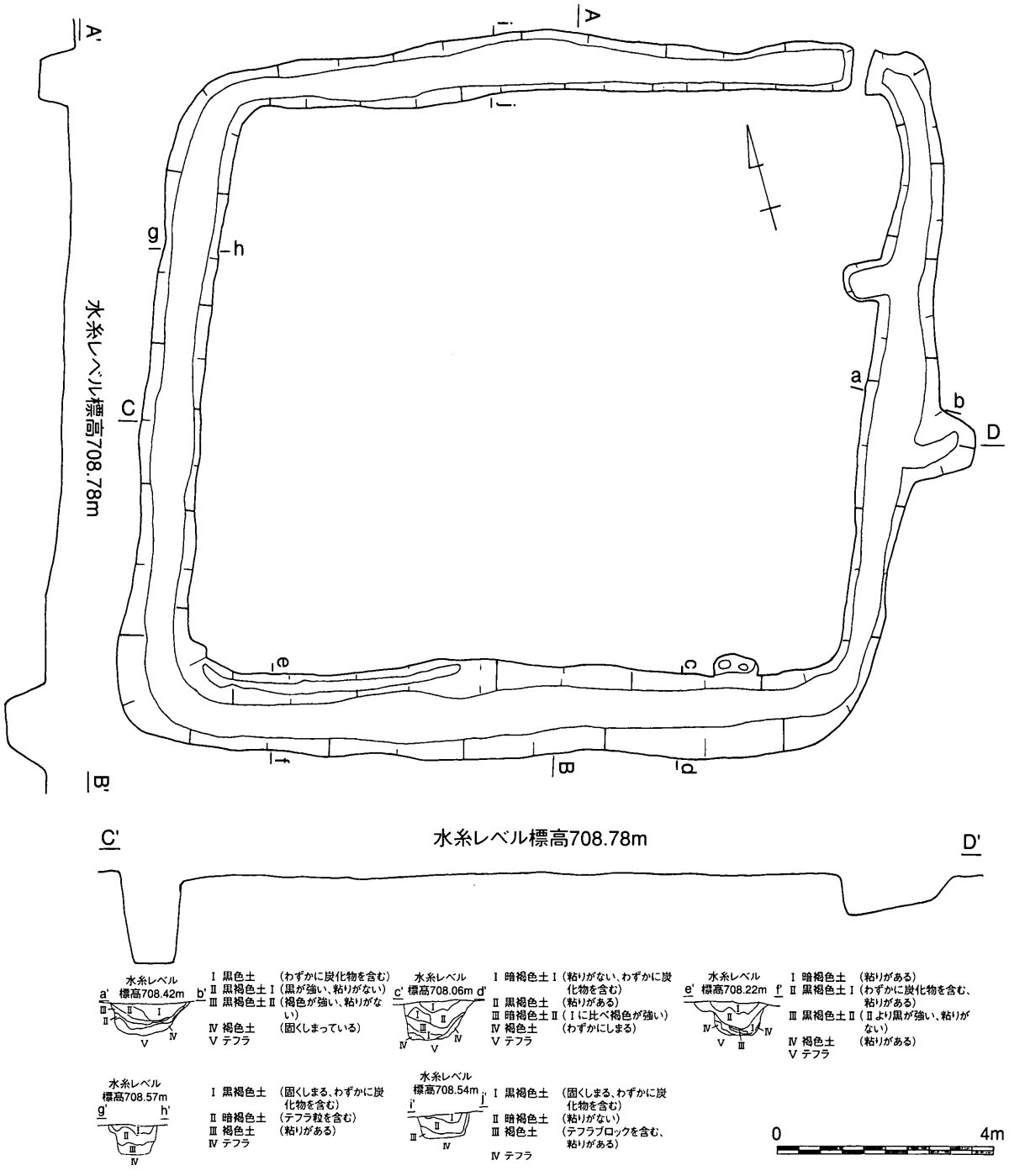
平面の形態は、北東隅で開口し、これが陸橋部となる。この部分の幅は外縁で40cm程度、内縁で30cm程度をそれぞれ測定でき、極めてそれは狭くなっていた。

北溝の長さは11.1m程度、最大幅1.1m程度、最小幅70cm程度、深さは40cm程度を算し、底面は東から西へ緩傾斜を成している。北溝をつくり出している南壁と北壁はともに外傾気味で、堅く、良好であった。北溝の堆積土層状態はセクション（ｉ～ｊ）を参照のこと。全般的に土層堆積は単純であった。

西溝は断面がＵ字状を呈し、長さは12m程度、最大幅1m10cm程度、最小幅90cm程度と、数値的に見て、大差はなかったが、平面プランは若干の凹凸状を成しながら南北に走っていた。西溝の底面は堅く、北から南への緩傾斜であったが、全般的に見て、深さは50cm程度を測る。

西溝を形成している西壁、東壁はともに外傾気味で、凹凸は少なく、堅く、良好であった。この溝の堆積土層状態はセクション（ｇ～ｈ）を参照のこと。全般的に順調な堆積状態であった。

南溝は断面がＵ字状を呈し、長さ12m80cm程度、最大幅1m80cm程度、最小幅1m50cm程度を算し、その数値に限っては大差はなかったが、平面プランはほぼ直線状を成していた。底面はハードテフラ層中に構築され、ほぼ平坦、堅く、良好で、85cm程度と深く、溝らしい形態を呈していた。この溝を形成している北壁、南壁はともに外傾が強く、良好であった。南溝の土層堆積状態はセクション（ｃ～ｄ）（ｅ～ｆ）を参照のこと。全般的に両壁面の近くには土



第13図　第１号方形周溝墓実測図

層の混入変化が顕著であった。

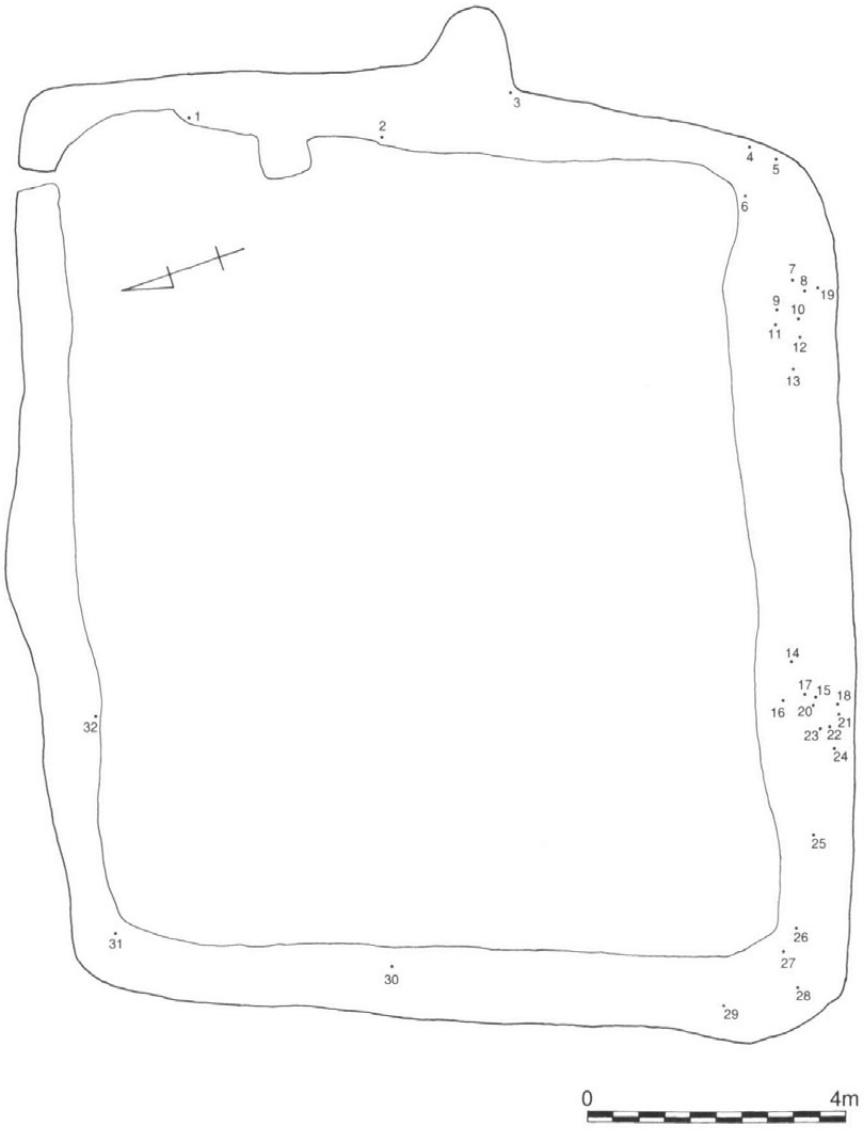
東溝は断面がタライ状を呈し、長さは11m50cm程度、最大幅1m20cm程度、最小幅70cm程度とその数値にはバラツキが見られたが、平面プランは若干の弧状を描く。底面は堅く北から南へ緩傾斜を成し、若干の凹凸を認め、全般的に深さは55cm前後を算出できた。

これらの溝を構築した東壁、西壁は外傾気味で、凹凸は少なくて、良好であった。土層堆積状態はセクション（ａ～ｂ）を参照のこと。全般的に順調な堆積で、混入の変化は両壁付近が顕著であった。

遺物

（第14～15図
図版６～７）

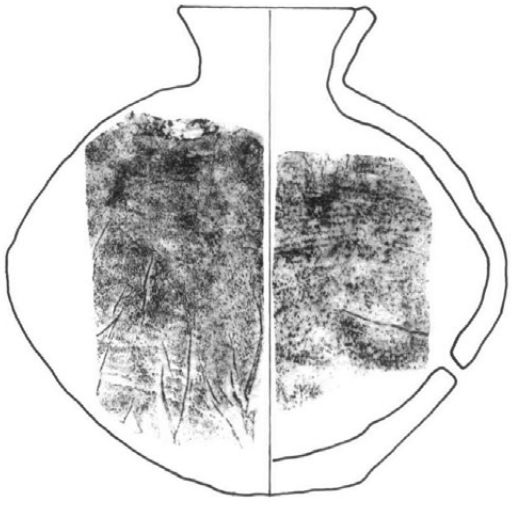
第14図第１号方形周溝墓出土遺物分布図内にドットマップしてある地点は32ヵ所を数えるが、その内、本遺構に直接的に関連しているのはNo.20～No.24の５地点だけに限定される。No.22の人骨を除いてこれらは全て弥生後期の土器で、しかも同一個体であった。そのうち、最も大きのはNo.20に図示されている。最終的にこれらの４片は接合できた。



第14図　第１号方形周溝墓出土遺物分布図

その他、図示してある遺物は全て縄文中期に関してのものであり、何かの機会に四方向の溝に落ち込んだのであろう。

第15図の土器は前述したように、第14図のNo.22を除いたNo.20、No.21、No.23、No.24の４片を接合すると、このような姿になる。器高は12.7cm。最大径を胴部に持ち、13.2cmを、器厚は6mmから7mm程度をそれぞれ測る。全般的に小形の部類に属する弥生後期の壺形土器であり、胴下部に直径3mm程度の小孔を穿けてある。内・外面ともに擦痕が認められる。このような土器は方形周溝墓から出土する場合が比較的に多い。赤褐色を呈し、焼成は良好である。埋葬時に



第15図　第１号方形周溝墓出土
土器実測図（１：２）

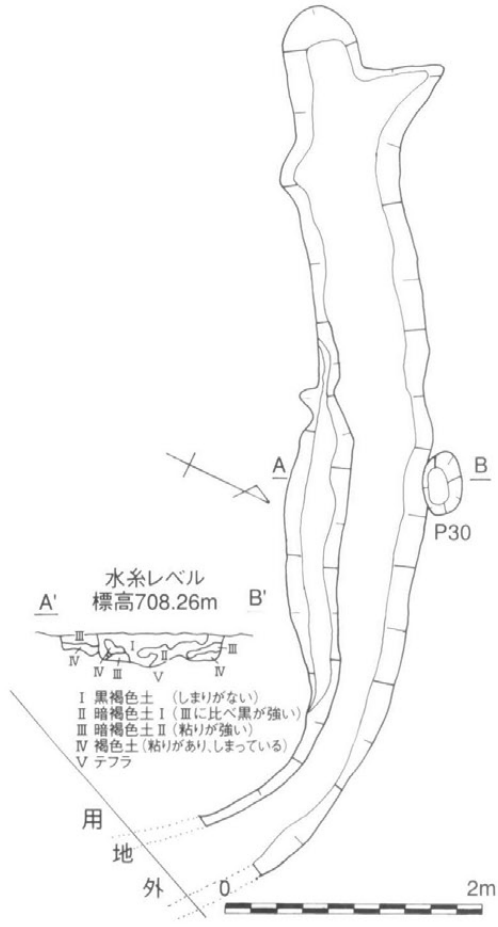
はNo.22の人骨をこの壺の中に入れたのであろう。

少量の骨片の出土があり、墓域的存在を実証してくれた。

第２号方形周溝墓（第16図　図版６）

これは第11号トレンチから第12号トレンチの東側の一部分に検出され、その他の大部分は用地外の為に発掘調査は出来ずに、全体から見て北溝の部分だけのわずかな調査に留まった。表土層面から50cm位下層のソフトテフラ層を掘り込んで構築されている。北溝部分の最大幅は1m10cm程度、最小幅は45cm程度であり、これの東端部はわずかにカーブを描き始める。

溝の深さは25cm位を測る。溝の両壁面はやや外傾気味で軟弱を、底面は凹凸が顕著で、軟弱状態をそれぞれ呈していた。



第16図　第２号方形周溝墓実測図

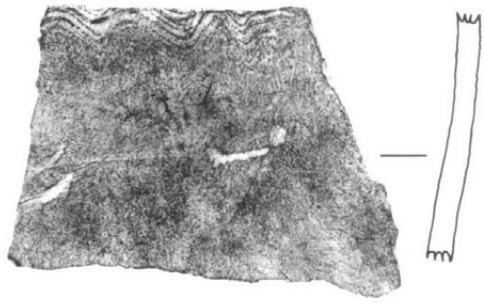
遺物（第17図）

本図の土器拓影は第２号方形周溝墓の溝内より検出された３片の土器であり、いずれも文様は剥落してしまっていて、見るわけにはいかないが、胎土及び色調からみて、弥生後期の土器片である。従って、第２号方形周溝墓は弥生後期に属する。

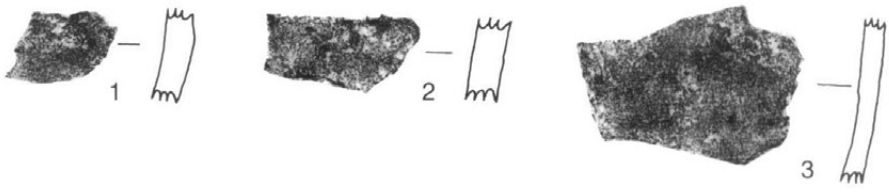
（４）トレンチ内出土の弥生時代の遺物（第18図）

第12号トレンチ内より出土した弥生後期の土器片である。赤褐色を呈し、焼成は良好で、器厚は6mm程度と中厚手に属する。破片の上部には数条を一束にした櫛描波状文が波長を長くしながら横走している。中・下部に至っては無文帯が広範囲を成している。

（飯塚政美）



第18図　トレンチ内出土土器拓影（１：２）



第17図　第２号方形周溝墓出土土器拓影（１：２）

第Ⅳ章　所　　見

今回の緊急発掘調査での極だった特徴は弥生時代後期の方形周溝墓２基の検出であった。現在、方形周溝墓の学名は日本考古学会ではなんの抵抗もなく、一般的に呼ばれているが全国的に見て、方形周溝墓の研究史は研究過程において大般、四時期に分けられる。

このことについて山岸良二著　考古学ライブラリー８『方形周溝墓』ニューサイエンス社昭和56年刊行に基づいて記述したことを標示しておくことにする。

第一期　昭和39年（1964）７月、東京都八王子市宇津木向原遺跡発掘調査団長であった大場磐雄博士が発掘調査の段階では「方形周溝特殊遺構」と仮称されていたが、同年10月の日本考古学協会（群馬大学）秋季大会では墓の可能性が強いと考え「方形周溝墓」の名で発表している。なかでも周溝内より検出した「底部穿孔土器」に論点の中心が集中していた。

第二期　この時期に突入すると、方形周溝墓に酷似した遺構が全国的に発見され、その増加曲線は鰻登りであった。数多くの類例を紐解きながら、研究会が意欲的に開催され、続いて、それを前提とした興味深い論文が発表され、次々に新説が提唱されぱなしであった。

第三期　1970年代前半に至ると、古墳の発生時期、弥生後期の墓制に関連する論考の一大ブームが起こり、これを展開させるには方形周溝墓を取り扱わなければ問題解明の糸口がつかめないとの考え方が定着し、それにまつわる論文が次々と発表された。

甘粕健氏は方形周溝墓の伝播形態に注目し、「古墳の成立・伝播の意味」の標題にて論をくり広げている。この論考の主旨は「畿内に起源を有する特異な墓制（方形周溝墓）が弥生時代後期に、先進地域の北九州に対しても、後進地域の関東に対しても、ひとしく伝播している事実は、その後における畿内の古墳文化が東西に急速に伝播する前提として注目すべき現象である」と述べている。

昭和47年（1972）には特筆に値する３編の論文が公表された。まず、最初は水野正好氏の「古墳発生の論理（１）」であり、論旨は方形周溝墓と銅鐸を代表しての弥生時代の事象としての把握方法を論じ、方形周溝墓について「姿」「世界」「系譜」「古墳の発生」の四つの観点から従来と異質の理論展開を記述してある。

次に、金井塚良一氏の「関東地方の方形周溝墓」の論考の中で、氏は農業共同体の展開と方形周溝墓の発展過程を多くの資料を基にして、３段階に分析、分類している。それは次の通りである。

・第一段階　　プリミテイブな農業共同体。縄文社会の伝統を強く残している。
・第二段階　　前段階の小集団が、世帯共同体として把握され、世帯共同体自体も分化が進み、有力なそれも現れてくる。
・第三段階　　共同体内部の分化・自立化が進み、世帯共同体の私的所有にも増加がみえ、農業共同体の族長層は、首長権力との結びつきを強め、抜きん出た族長権を

示してくる。

三番目に脚光を浴びた論文として、井口喜晴氏の「古墳の発生をめぐって」である。この論文の主要なことは弥生時代から古墳時代の墓制の変遷を５段階に細分化した点にある。これらを簡略的にまとめてみると次のようになる。

１共同墓地の段階――各墓のあいだには、著しい差は見られない。(弥生時代前期)

２共同墓地的なあり方を示していたものの中から、若干特別な扱いを受けるものが出て来る。(弥生時代中期)

３方形周溝墓（首長とそのまわりの人々）が共同体の集落を離れず、その付近に営まれている。(弥生時代後期)

４方形台状墓（首長とそのまわりの人々）がすでに集落を離れて丘陵尾根などに営まれる。まだ首長個人のための墓として存在しない。(弥生時代末期)

５円形墓または方形墓とよばれる首長個人のための墓が、共同体集落から仰ぎ見られるような位置に営まれる。(弥生時代末期～古墳時代前期)

６古墳―大形の前方後円墳および前方後方墳などの高塚古墳

・第四段階　　昭和50年代に入ると、日本各地で各種の開発事業が導入され、それとともに数多くの発掘調査が行われ、新たなる方形周溝墓の発見が続々と発表されてきた多くの論文中で、全国的に取り扱った論文、佐原真氏が『日本考古学を学ぶ　３』の中の「弥生時代論」で、これについて次頁全面にわたって掲載しておく。

以上、全国的に見た研究史を中心にして段階的に述べてきた。現在、上伊那で方形周溝墓が検出された遺跡名とその数を記す。

・樋口五反田遺跡（辰野町樋口）２基　　・堂地遺跡（箕輪町大原）１基
・久保上ノ平遺跡（南箕輪村久保）９基　　・南小出南原遺跡（伊那市西春近南小出）１基
・駒ヶ原南遺跡（宮田村大原）２基　　・反目南遺跡（駒ヶ根市東伊那）３基
・殿村遺跡（駒ヶ根市東伊那）１基

これらのうち、南小出南原遺跡の方形周溝墓を（伊那市教育委員会『南小出南原遺跡緊急発掘調査報告書』1978）より記載する。

方形周溝墓は、南西の一隅で第２号住居址（奈良時代）に貼床されている。従って、本周溝墓が古く、第２号住居址が新しい。周溝外縁から測定すると、南北8.9m、東西9mの規模である。各溝の説明は、方位によって北溝、西溝、南溝、東溝と名付けておきたい。周溝は第２号住居址とほぼ同一レベルより掘り込んである。平面形態は、西側中央部が開口し陸橋部となる。陸橋部の幅は外縁で、1m、内縁で0.4mを測定できる。

北溝は長さ7.5m程、最大幅1.1m位、溝の深さは大方一定で0.8m位を算出できた。断面は内

方形周溝墓の変遷（『日本考古学を学ぶ』３、佐原真「弥生時代論」より）

	Ⅰ　期	Ⅱ　期	Ⅲ　期	Ⅳ　期	Ⅴ　期	古墳時代	各地データの補註
九州	（箱式石棺墓） （木　棺　墓）		（甕　棺　墓）		（箱式石棺墓） （土　壙　墓）	単 熊本塚原	福岡常松（Ⅳ期）は方形周溝墓の可能性。他はすべて古墳時代。
四国				単 釈迦面山			釈迦面山の主体部は箱式石棺。五基とも単独。
山陰			■ 天　神	■ 青　木		✕ 仲仙寺	四隅突出墓は他に宮山、来美、来原などにもある。
山陽			（長墓）（方形台状墓） ↕　↕ （短墓）（土　壙　墓）		（墳丘墓）		Ⅲ期は雄町、Ⅳ期は用木山、Ⅴ期は楯築などのデータによる。
近畿	複 東奈良	複 宮ノ前	複 瓜生堂	■ 安　満	単 東奈良		Ⅴ期の東奈良では３基とも単、大王山は複。Ⅲ期には土壙墓群も発達。
伊勢湾			■ 東庄内	■ 納　所	■ 大　籔		東庄内はⅡ期にさかのぼる可能性（貝田町式、直前式）
北陸			■ 源田山			✕ 杉谷４号	Ⅲ期には土壙墓も多い。
中部高地					単 長野各地	■ 長野各地	長野県では58遺跡の絶対多数が単独で、まれに２～３の複数墓がある。
駿河湾			■ 高見ケ丘	単 狐　塚	■ 伊　場		〈凡例〉 ①単・複は１方形周溝墓にもうけられた墓（主体部）の数が単数か複数かを示す。 ②Ⅰ～Ⅴ期の区分は『弥生式土器集成（本編）』の北九州・畿内地方の各土器様式の行われた時期を示す。
関東		（再葬墓）		単 歳勝土他	単 久ケ原	単 宇津木他	
東北						■ 今熊野	

傾が小さく、U字型を呈していた。溝内の堆積土層は複雑で、自然埋没による三角形状堆土の状態がみられた。溝はソフトローム層を切り込み、壁面の真中辺まではソフトローム層、それより下はハードローム層になっていた。従って、底面もハードローム層によってつくられていた。

西壁は南側で第2号住居址の床面より下に溝が走っている。そのために、平面プラン南西隅には第2号住居址の壁面の一部が残存している。溝の長さは6.5m、最大幅1.2m、その断面は下端が小さくなるU字型を呈し、状態は北壁と大差はない。陸橋部より北側は幅広く1.3m、南側は狭く1mくらいである。深さは一定であり、溝内の土層は複雑であり、溝底より0.2mくらい浮いて花崗岩が転落していた。

南壁は西側の一部分で第2号住居址の壁面の一角が残存していた。長さ約7m、幅1.2m、溝の深さは0.7mくらいで、状態は前の二つと大方同様であるが、わずかに、東によるに従って浅くなっている。

東壁は、長さ7.7m、幅1m、深さ0.6mくらいであり、断面は下が小さくなるU字形であり、溝底の幅、深さとも前の三つよりも狭く、また浅くなっていた。主体部は、桑園耕作のための撹乱によって発見されなかった。

遺物の出土は何もなかった。

最後に、今回、検出された方形周溝墓2基についての意義づけを述べておこう。第1号方形周溝墓は南北13m10cm程度、東西14m60cm程度の規模を有し、それとしては比較的に大規模であった。状態、内容については本文を参照して頂きたい。特に注目したい点としては人骨の出土及び穿孔土器の出土はまさしく、墓的存在性を強く実証させてくれた。第2号方形周溝墓は大部分が用地外の為にその実態は不詳な面が大部分であった。

まこもが池遺跡は全般的に見て、前回の第一次調査地点は弥生後期の集落址が、今回の第二次調査地点は墓域がそれぞれ設定されていたのであろう。つまり、生活空間と死後の空間を場所的に分離していたのである。もう少し、広範囲の調査を実施したならば、数多くの方形周溝墓が発見されたであろう。

今後、この2基の方形周溝墓が墓制研究に大いに活用されることを切に願う次第である。

（飯塚政美）

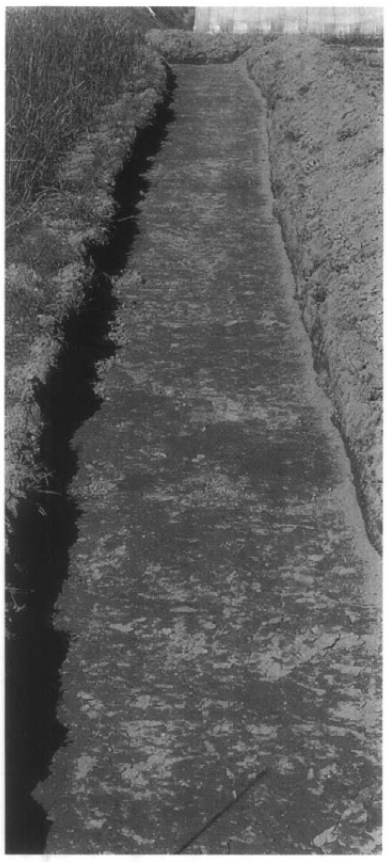
図　　版

図版1　遺跡遠景

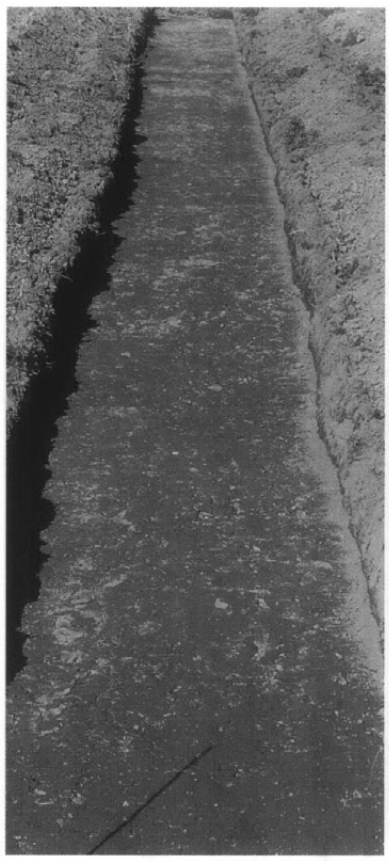
遺跡地を東側より眺む

遺跡地を南側より眺む

図版2　発掘調査状況

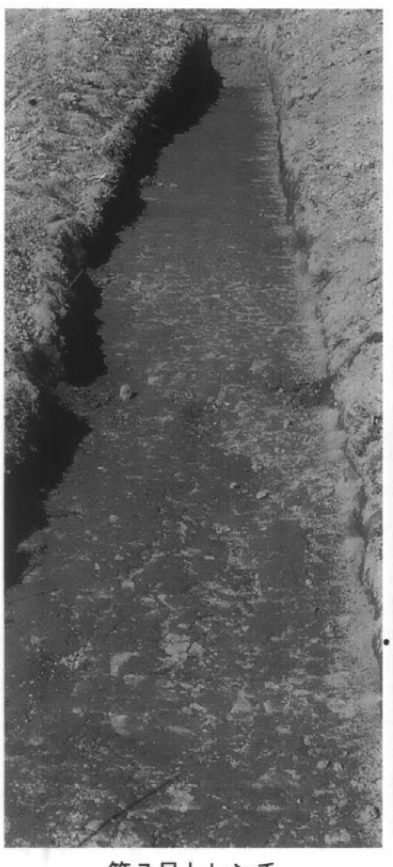


第１号トレンチ

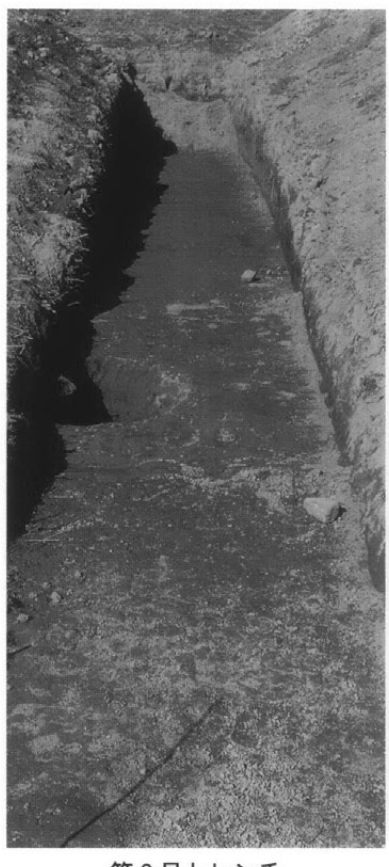


第３号トレンチ

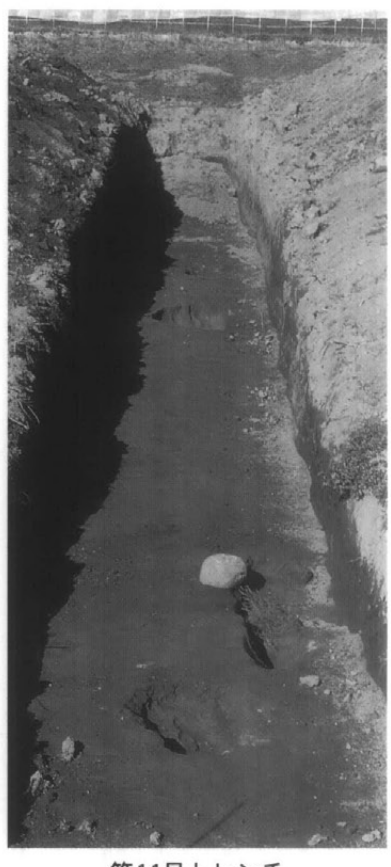
第５号トレンチ



第７号トレンチ

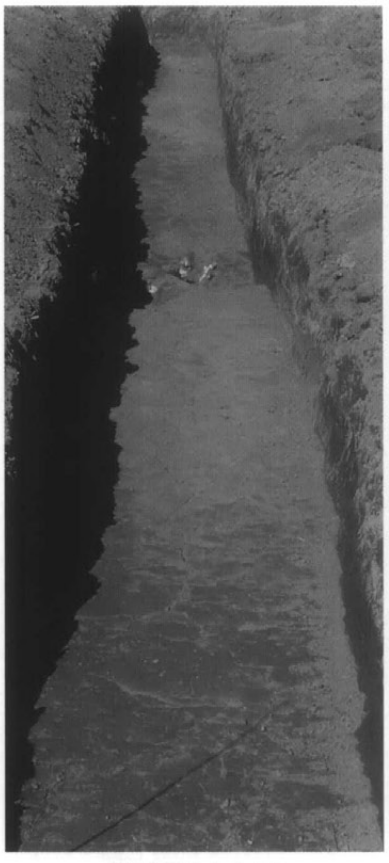


第９号トレンチ



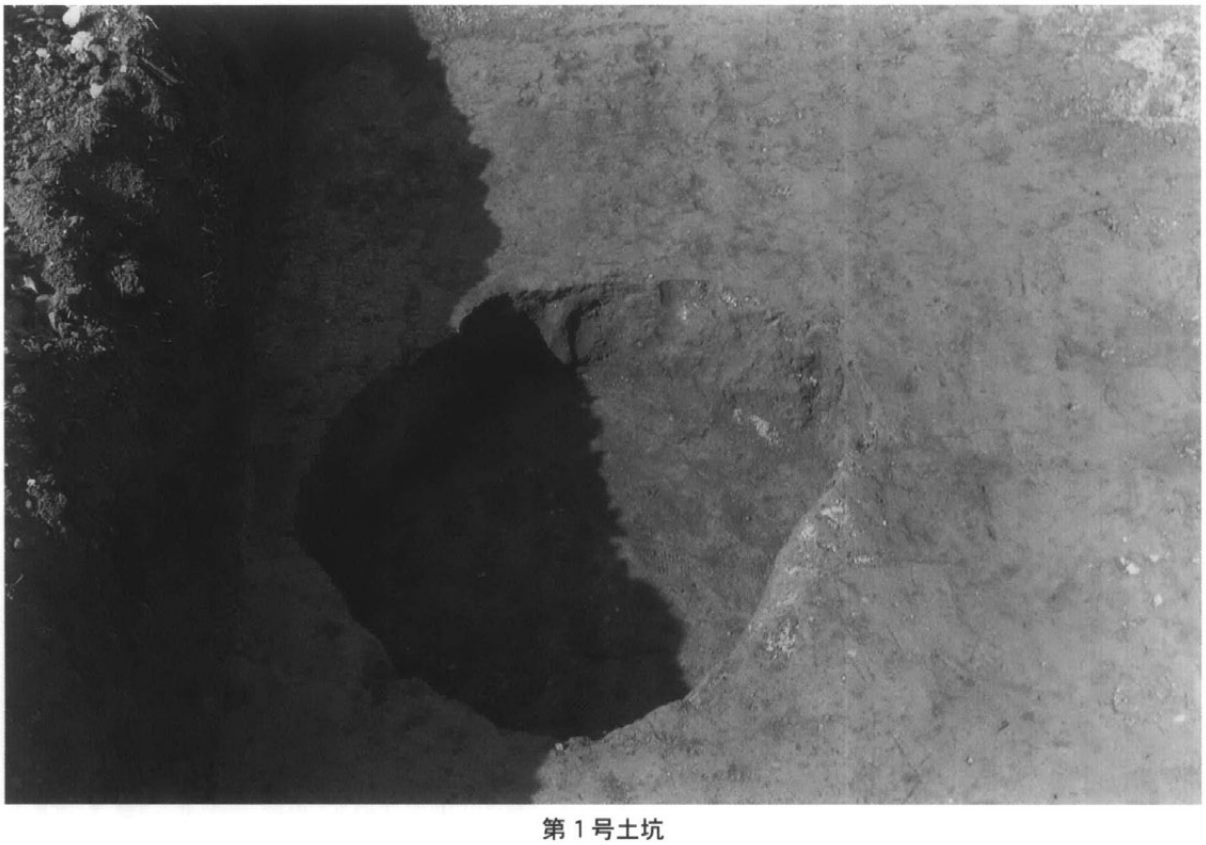
第11号トレンチ

第13号トレンチ



第15号トレンチ

第17号トレンチ



第１号土坑

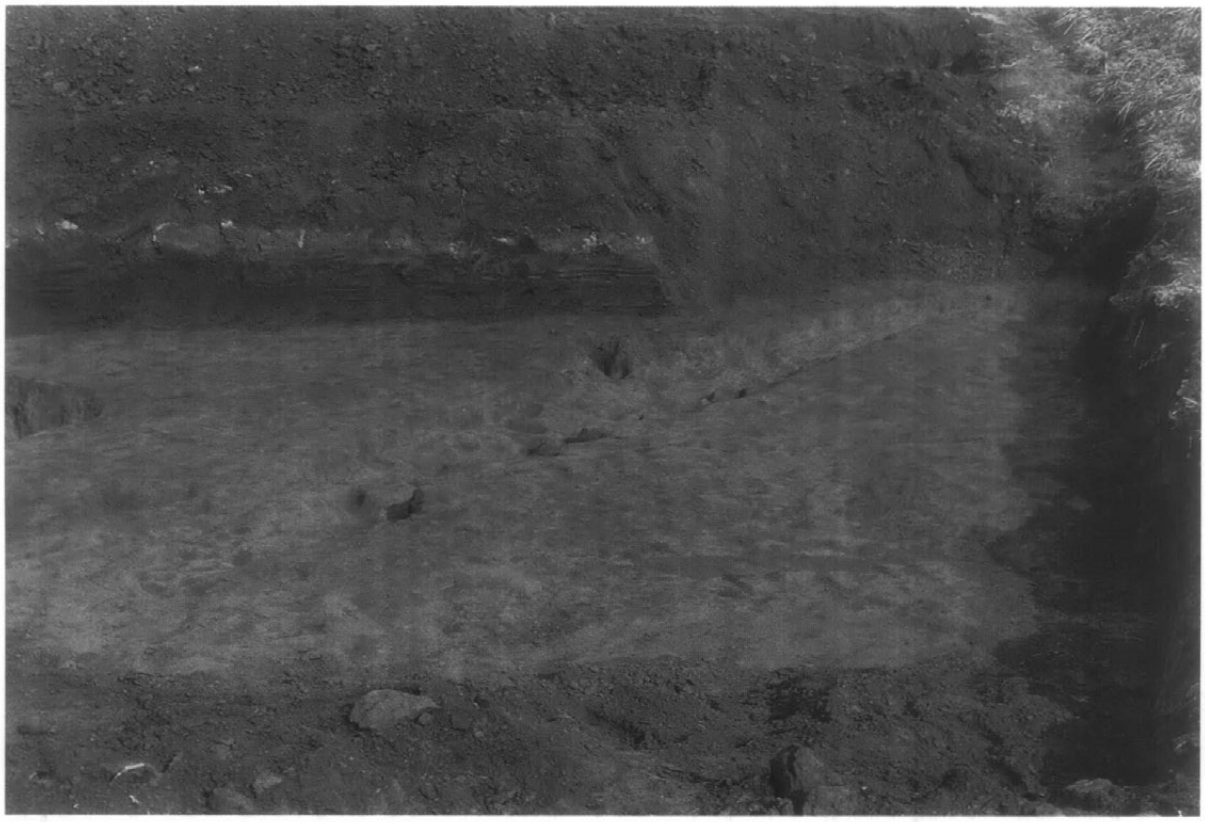
第2号土坑

第3号土坑

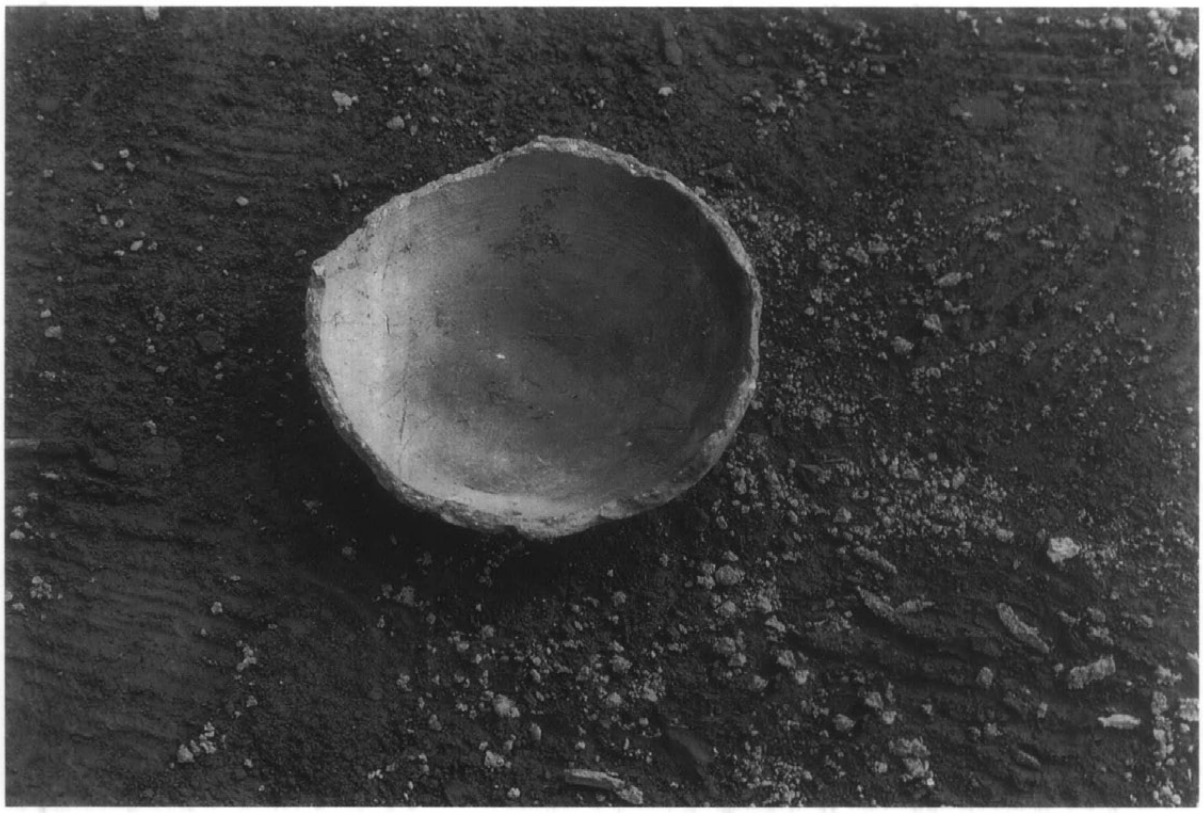
第１号方形周溝墓（東から見る）

第１号方形周溝墓（西から見る）

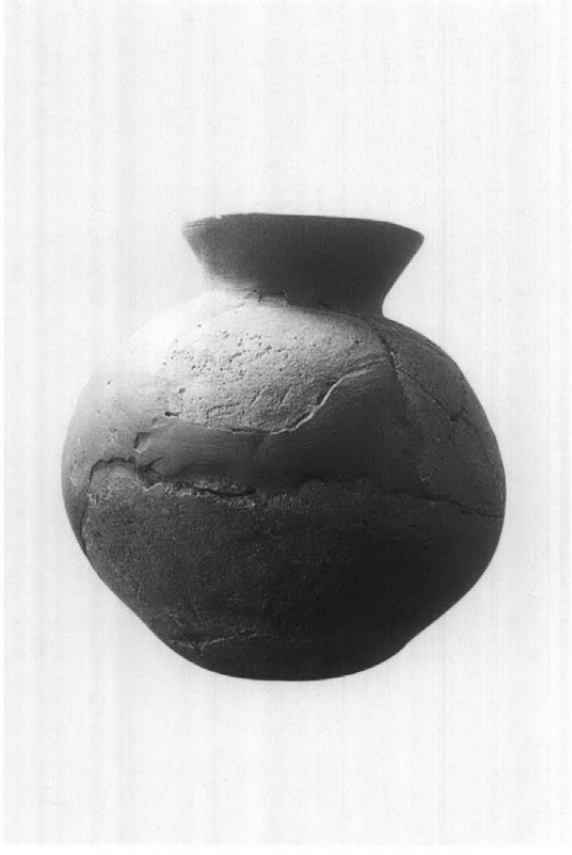
図版6　遺構及び遺物出土状況



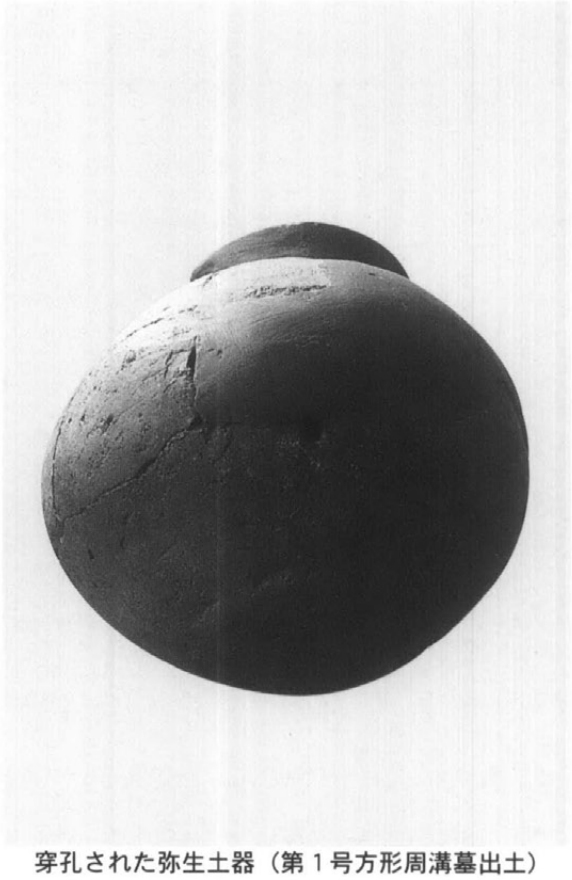
第2号方形周溝墓



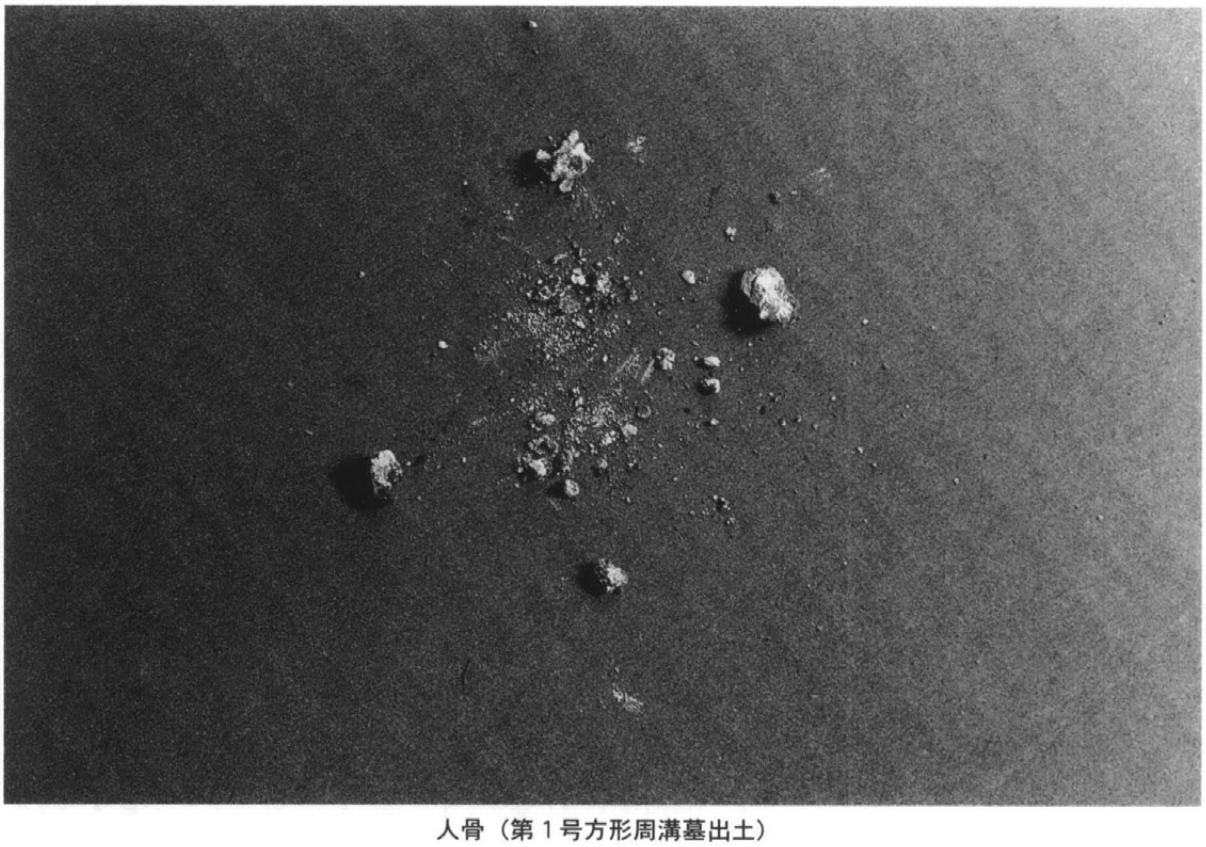
弥生土器出土状況（第1号方形周溝墓）



弥生土器（第１号方形周溝墓出土）



穿孔された弥生土器（第１号方形周溝墓出土）



人骨（第１号方形周溝墓出土）

報告書抄録

ふりがな	まこもがいけ
書名	まこもが池遺跡
副書名	富県宅地造成事業
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
編著者名	友野良一　御子柴泰正　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦2002年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
まこもが池（いけ）	ながのけん いなし 長野県 伊那市 いなやまでら 伊那 山寺	伊那市	264			平成13年 9月25日 ～ 平成13年 11月9日	2,500	富県宅地 造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
まこもが池	集落址	縄文時代 弥生時代	土坑　3基 方形周溝墓　2基	縄文中期土器 縄文中期石器 弥生後期土器	2,500m²に及ぶ広い範囲の発掘調査であったにもかかわらず、縄文時代中期土坑3基、弥生時代後期方形周溝墓2基が検出され、なかでも方形周溝墓の検出は伊那市内に於いては特に注目に値する。

まこもが池遺跡

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

―富県宅地造成事業―

平成14年３月13日　印　刷

平成14年３月15日　発　行

発行所　伊那市教育委員会

印刷所　伊那市　㈱小松総合印刷